

デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の 社会的共有システムの構築

小助川 貞 次

1. 漢文訓読研究の現状

○漢字文化圏における漢文訓読の意義

漢文訓読が日本以外の漢字文化圏でも行われていたことは、1960年代後半から知られており、特に2000年に韓国で発見されたヲコト点資料（点吐口訣資料）は、漢文訓読の国際的研究を飛躍的に発展させる大きな契機となった¹。現代のように高度に発達した情報通信ネットワークを持たない時代に、訓読という共通の方法で中国文化（漢字文化）を受容していたことは、時代と範囲は異なるとしても、東アジア版グローバリゼーションと捉えることが可能であり、現代のグローバリゼーションの行方を見極める上でも重要な意義がある²。

○漢文訓読に対する社会的認知

しかし、このような漢文訓読の国際的研究と意義は、専門的な事典を除けば一般社会ではほとんど認知されていない。特に高等学校における必修科目「国語総合」の検定済教科書や日本を代表する国語辞典で全く取り上げられていないという事実は、社会的認知の低さを如実に示している（別表1，別表2）。さらに、この分野に関する日本側の研究状況も低迷しており、韓国側の研究状況と比べて格段の遅れを取っている。日本の訓点語学会と韓国の口訣学会のHPを見ただけでも、研究者間の情報共有や社会への研究成果の発信という点で歴然とした差がある。早急に研究態勢の立て直しと社会的還元の方策を図る必要がある。

○漢文訓読資料が持つ構造的問題

このような状況は、実は以下のような漢文訓読資料の構造的 성격にも原因がある。

- ・漢文訓読資料は貴重書（国宝、重文など）であることが圧倒的に多い
- ・所蔵機関は公的機関（博物館・図書館）以外の特殊文庫・古社寺・個人が多い
- ・漢文訓読資料は墨書本文に朱・墨・白・角点などが加点された立体的構造物である
- ・加点は微細かつ複雑であるために認定作業が難しく閲覧環境による影響を受けやすい
- ・仮名文献のような安価な複製方法では原本を再現することができない

そのため、原資料をイメージできる複製本や教材そのものが非常に少なく、高等教育においても漢文訓読をテーマとする授業がほとんど行われていないのが現状である³。

表1 国立大学において「訓点資料」を取り上げた2009年度の授業一覧

大学名	科目名	担当者	学年	テーマ
山形大学	日本語学概論2	中澤伸幸	2-4	日本語史資料概説
東京大学	国語学特殊講義	月本雅幸	不明	訓点資料の諸問題
お茶の水女子大学	日本語構造論特殊講義	染谷裕子	2-4	日本語の語彙史
富山大学	日本語学特殊講義	小助川貞次	2-4	東アジア学術交流史としての漢文訓読
神戸大学	人文学導入演習	矢田勉	不明	言語史研究法入門
広島大学	日本語史	松本光隆	3	漢文訓読語の歴史

例えば藤井有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』は、1901年以来度々複製資料の公刊や解説がなされてきたが、加点の事実については、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫マイクロフィルム(A436A)の巻頭コマにある記事「朱筆句点ヲコト点、朱(交一部墨)反切、朱墨校合注書入あり(昭和43年4月7日撮影)」と、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(1982年)の「その他平安中期の経書訓点資料として『唐鈔本左伝残卷(複製本による)』があり、これにも「汪烏黄反」「向先亮反(桓公第二)等の反切注が書込まれており、いずれも通志堂本經典釈文と一致する」(637頁)という指摘があるのみで、訓点資料であることの全容について論じられたのは2001年以降のことである⁴。コロタイプ印刷の複製資料でも微細な加点を確認するのは容易なことではなく(図1)、漢文訓読資料が持つ構造的問題を示す顕著な例であるが、実は問題はそれだけにはとどまらず、マイクロフィルムのラベルという情報共有の問題や、唐代写本に加点がなされるということへの認識の在り方が問われる問題でもある。

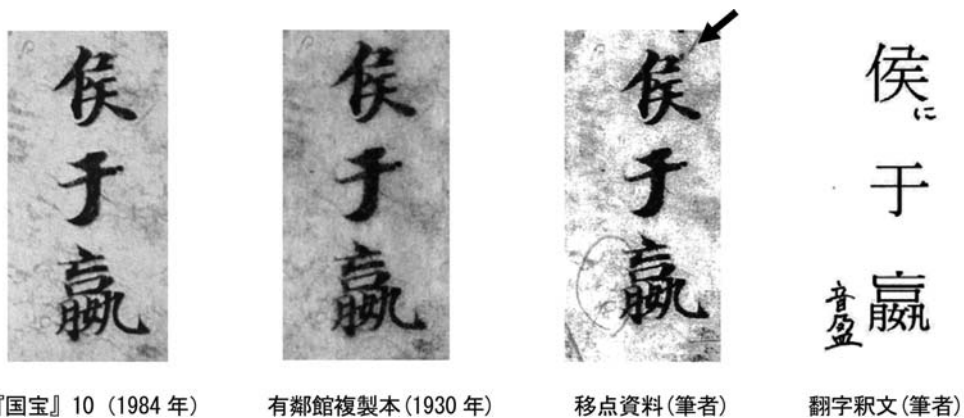


図1 春秋経伝集解卷第二(37行目)の比較(ヲコト点は平仮名で示す)

○デジタルアーカイブの有用性と限界

このような漢文訓読研究を巡る諸問題は⁵⁾、日本の研究態勢がデジタル化時代に全く対応していないことにも大きな原因がある。現在、国内外では漢文訓読資料を含むデジタルアーカイブがいくつも運用されている。敦煌文献におけるIDP (International Dunhuang Project)、国立博物館が所蔵する国宝・重要文化財におけるe 国宝などは、インターネット上で鮮明なカラー画像を提供しており、漢文訓読研究にとって強力な支援策となるはずである。これらに基づいた研究成果もすでに報告されている。ただし、現状のデジタルアーカイブはその構築・公開と引き換えに原本保全の目的で実地調査の機会が縮小される傾向にあること、立体的構造物である漢文訓読資料を二次元処理にしていること (図2)、書誌情報や画像配置 (図3)、画像精度に不完全なものが多いことなど (図4)、本格的に利用するには問題が多い。これらの問題を回避するには、デジタルアーカイブが企画される段階で、ユーザの多様なニーズをいかに保証するかということが十分に議論される必要がある。

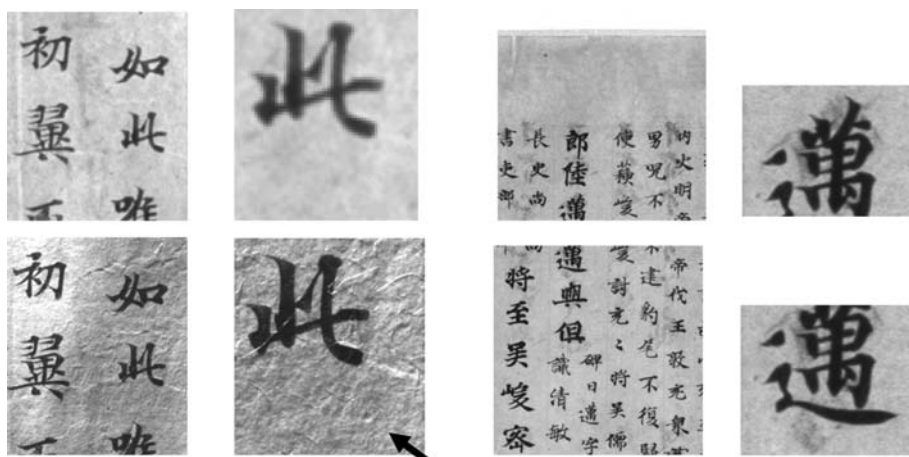


図2 世説新書 (東博本35行目) の角筆点 (矢印部分) 図3 世説新書 (京博本21行目) のe 国宝「邁」
上段: e 国宝, 下段: 筆者撮影

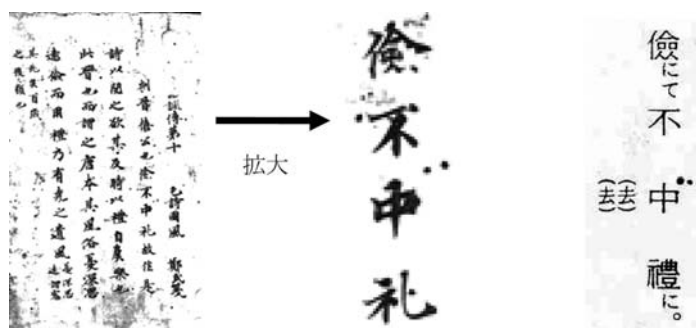


図4 毛詩唐風 (左・中央: 岩崎文庫善本画像データベース, 右: 石塚晴通による翻字釈文)

2. 漢文訓読資料を含むデジタルアーカイブの検証と提言

現在、構築・運用されている漢文訓読資料（訓点資料）を含むデジタルアーカイブには有用なものが多いが、立体的構造物である漢文訓読資料に対する基本的な認識や画像処理の点で不十分さが目立ち、またユーザ・インターフェースという点でも多くの課題を抱える。いくつかの代表的なデジタルアーカイブについて、想定される様々なユーザの立場から検証と提言を行う。

《ケース1 I D P（International Dunhuang Project）における漢文文献の取扱い》

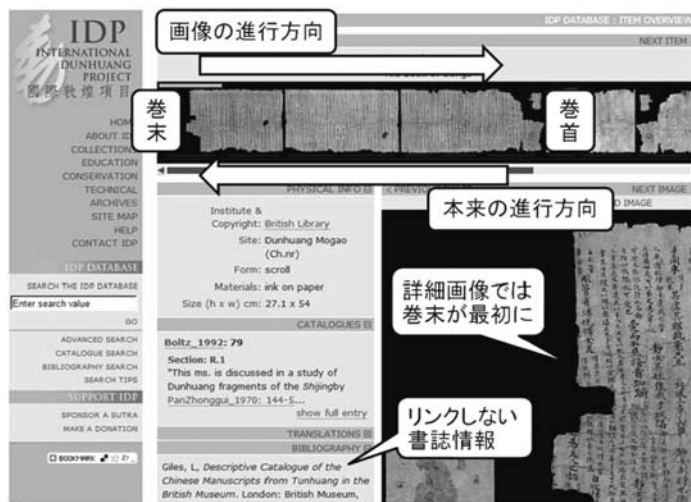


図5 I D P 画像（S.10 毛詩鄭箋）

画像配置の問題

- ・縦書左進行の漢文文献とは逆に、左から右へと進行する
- ・検索結果を示すサムネイルは巻末が表示される
- ・全体画像（stitched image）は左側表面、右側紙背（各断片が逆転する場合もある）
- ・詳細画像は左（巻末）から右（巻首）へと進行する

書誌情報の問題

- ・加点情報がない（参考文献とリンクしない → Giles 目録には加点情報あり）
- ・料紙の情報が不足（紙質や紙数の記載がない、表示される寸法が不明瞭）
- ・保存状態についての記載がない（画像は現状を反映しない）

加点点本の画像が少ない⁶

総じて、縦書き左進行する漢文文献（中国文化）を横書き右進行する西洋文化で置き換えているところに問題があると言える。デジタルアーカイブの問題以前に、本国以外の文化財をどのように保存・修復するのかという基本的な方針の違いが潜む問題である⁷。IDPはすでに国際的に運用されているデジタルアーカイブであり、設計そのものの変更を求めることは困難であるが（設計は1995年）、日本の写本学や漢文訓読研究の立場から書誌情報を提供することは可能である⁸。

3. 漢文訓読研究に関わる高等教育の検証と教育システムの構築

漢文訓読研究に関して社会的認知が欠如しているのは、社会的還元、特に高等教育における扱いが不十分だからである。漢文訓読研究に関わる高等教育の現状を検証し、デジタルベースによる新たな教育システムの構築を試みる。

国立大学における漢文訓読研究に関係する授業については表1に掲げたが、高等教育における現状を見るもう一つの指標として、漢文訓読研究が行われていることが予想される国立大学の学会誌と専門の学会誌における過去10年間の漢文訓読関係の論文数を掲げる。

表2 過去10年間に学会誌に掲載された漢文訓読関係の論文数

発行冊数	東京大学 国語と国文学		京都大学 国語国文		北海道大学 国語国文研究		日本語学会 日本語の研究		小計	同時期に開催された 国際ワークショップ等	訓点語と訓点資料	
	月刊 901~1021号		月刊 773~892号		年間3冊 111~134号		年間4冊 196~235号				年間2冊 102~121輯	
	論文	書評	論文	書評	論文	書評	論文	書評			論文	展望
1999	0/19	0/25	0/8	0	0/15	0/1	0/27	1/16	1		1/10	0
2000	0/8	0/34	0/5	0	2/18	0/1	1/34	1/12	4	(韓国点吐口談資料発見)	0/9	0
2001	0/6	0/32	1/11	0	1/9	0/0	0/13	0/18	2	北海道大学、朝鮮学会	2/9	0
2002	1/30	0/19	1/11	0	0/13	0/0	1/18	1/13	4	北海道大学	0/10	0
2003	1/8	0/33	0/9	0	0/16	0/0	0/29	1/14	2	富山大学	0/10	0
2004	0/5	0/21	3/10	0	0/11	0/0	0/18	0/11	3	北海道大学、富山大学	0/9	1
2005	1/22	0/27	0/14	0	0/4	0/0	0/29	0/24	1	東方学会、ソウル市立大学	0/14	1
2006	1/7	0/24	1/9	0	1/9	0/0	0/24	1/15	4	北海道大学	4/10	0
2007	0/12	0/27	0/6	0	1/10	0/0	0/18	1/19	2	ソウル大学、二松学舎大学	2/9	0
2008	1/7	0/18	0/3	0	0/5	0/0	2/25	0/15	3	ソウル大学、明知大学	2/15	0
小計	4/124	0/260	6/86	0	5/110	0/2	4/235	6/157	19		11/105	2

論文数の分母は『国語と国文学』『国語国文』においては国語学分野のみの数、『国語国文研究』『日本語の研究』『訓点語と訓点資料』はすべてを含む数。書評はすべての分野を含む。また『訓点語と訓点資料』の論文数における分子は、東アジア漢文訓読に言及もしくは関連する数

訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』においてすら、東アジア漢字文化圏の視点から漢文訓読を論じたものは極めて少ない⁹。ほかの学会誌においては、漢文訓読を扱った論文に出会えるのは数年に一度である。大学の学会誌が所属する学生・院生の研究成果の発表の場であることを考えるならば、高等教育の現状を強く反映したものと理解することができる¹⁰。

《ケース2 富山大学人文学部日本語学特殊講義（平成21年度前学期）》

この授業では、筆者が構成したデジタル画像を毎回使用し、合わせて授業内容の確認と質問・回答を兼ねた紙ベースの「質問カード」を使った。デジタル画像の使用は、必ずしも授業の質を保証するものではないが、少なくとも訓点資料をカラーで全員に提示することは可能であり、従来の白黒のプリント媒体とは比較にならないほどの教育的効果が期待できる。ただし、デジタル画像があれば誰でも同様の授業ができるわけではない。画像を構成した筆者本人でも、原本を見たときの経験や移点記録、画像を使って何を伝えるのかということが明確に分かっていないと単なるスライドショーに終わってしまう。デジタルベースによって教育実践をしている研究者との情報交換が必要である¹¹。

授業回数：12回

履修登録者：100名（人文学部90名，人間発達科学部10名，オープンクラス1名）

授業テーマ：東アジア学術交流史としての漢文訓読

授業概要：漢文訓読は日本独自のものではなく、中国はもとより、漢字文化が及んだ中国周辺諸国の中で、それぞれの言語によって行われていた言語活動です。現代のように高度に発達した交通・情報ネットワークを持たない当時の人たちが、訓読という共通の方法で漢字文化を受容していたことは、文化・言語の接触という点で大変興味深いことです。この授業では、これまでの研究を踏まえて、東アジアにおける漢文訓読について概説を行います。また、必要に応じて漢文訓読をテーマとする学術的論文の作成過程についても論じます。

授業計画：

[第1ステージ] 古典籍と漢文訓読

[第2ステージ] 言語類型と漢文訓読

[第3ステージ] 漢文訓読の基本的仕組み

[第4ステージ] デジタルアーカイブの利用

[最終ステージ] 今後の漢文訓読研究のあり方

授業方法：デジタル画像とプリント及び「確認カード」による理解内容・質問収集（図6、図7）

デジタル画像（教材）：一般に入手できるもの（IDPデジタルアーカイブ，e 国宝などインターネット上のもの，図録集・複製本からスキャンしたもの）と筆者が個人的に所持しているもの（撮影資料及び移点資料）から構成



図6：Power Pointの利用



図7：質問カード実例

4. 情報交流についての社会的・国際的共有システムの構築

研究成果を国内外の学会等で公表することは当然であり、また商業誌に最先端の内容が報告されることも決して稀ではない。しかし、それでも漢文訓読研究が一般社会の目に触れ、関心を引き起こす可能性となると極めて低い。一般読者を対象にした漢文訓読に関する入門書や概説書が皆無であることが最大の原因であるが、実は、研究者内部でも研究方法や研究プロセスについての情報交流があまりにも少ないのではないかと問題がある。学会HPの貧弱な内容は、この問題を端的に表している。情報交流を促進するための一つの仕掛けとして、SNS (Social Networking Service) を利用したコミュニケーション・システムの構築を試みる。

《ケース3 富山大学人文学部日本語学演習（平成21年度前学期）》

この授業では、敦煌加点本の文献学的処理を目標に、IDP (International Dunhuang Project) 画像のダウンロード、漢文本文の作成、加点情報の付加作業、集計作業を行った。作業過程で富山大学PSNSを使い¹²⁾、コミュニティの中で課題の指示・確認・質問への回答、データの追加提示などを行った。富山大学PSNSはファイル添付にいくつかの制約があり、大量の画像を扱うには向いていないが、コミュニティ参加者の作業過程を時系列で管理できること、書き込み内容を全員で共有できることなど、情報の共有システムとして利用価値は高い。

授業回数：13回

履修登録者：36名（人文学部32名，人間発達科学部4名）

授業テーマ：東アジア漢文訓読資料の研究（敦煌加点本）

授業概要：漢文訓読は日本独自のものではなく、中国はもとより、漢字文化が及んだ中国周辺諸国の中で、それぞれの言語によって行われていた言語活動です。東アジアにおける漢文訓読の現象を理解するためには、日本語訓点資料の研究だけでは不十分で、多くの現存資料を持つ敦煌加点本に目を向ける必要があります。このことはすでに1960年代後半から一部の研究者によって着手され、その後半世紀近く地道な研究が続けられてきましたが、敦煌加点本個々の具体的な解説・記述作業は十分には行われていません。このような現状を踏まえ、この授業では、原本調査の済んでいる敦煌加点本の中から何点かを選び、デジタルベースによる処理作業（解説・記述）を行い、東アジア漢文訓読についての理解を深めるとともに、敦煌加点本についての社会的共有を目指します。前期はスタイン文献（大英図書館所蔵本）、後期はペリオ文献（フランス国立図書館所蔵本）を扱います。

授業計画：

- [第1ステージ] 東アジア漢文訓読と敦煌加点本
- [第2ステージ] デジタル処理（解説・記述）の設計
- [第3ステージ] デジタル処理（解説・記述）の実際
- [第4ステージ] デジタル処理（解説・記述）の点検
- [最終ステージ] 敦煌加点本を使ったレポート作成

授業方法：IDPから画像を取得し加点情報付テキストを作成。作成過程においてPSNSを使用して課題の指示・確認・質問への回答、データの追加提示などを行う（図8、図9）。



図8 PSNS（コミュニティ機能）を利用した授業

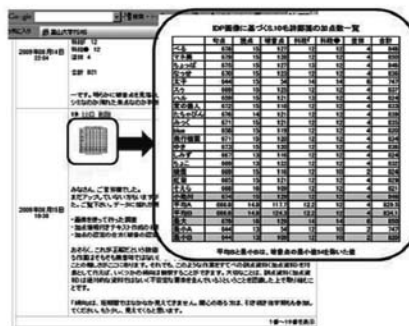


図9 加点数一覧（Excelを画像として添付）

《ケース4 ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵Dx2884古文尚書》

一方、授業以外でもPSNSの日記機能を使えばコミュニティ・メンバー以外の全ての利用者と情報交流をすることができる。これは京都国立博物館で特別展示（2009年7月14日～9月6日）されていたロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵のDx2884古文尚書（敦煌本）について、漢文訓読研究の観点から問題提起したものである¹³。



図10 PSNS（日記機能）を利用したDx2884古文尚書についての情報発信

富山大学PSNSは学内関係者専用のシステムであるが、市販のシステムを使えば特定の研究者（例えば訓点語学会）でSNSを利用することは可能である¹⁴。経費の問題は発生するが、それには代えがたい情報の共有ができる。

5. まとめ

本稿で紹介した研究手法は、従来研究者レベルの成果の共有にのみ重点が置かれていたことを根本的に見直し、研究資源の有効な活用方法に関して、ユーザからの検証と提言、研究プロセスと研究成果の社会的・教育的還元を目指す点で、これまでの研究には見られない特徴を持つ。本稿によって、この分野に関わる研究活動が格段に活性化するばかりではなく、グローバリゼーションをめぐる現代的課題に対しても有効なアプローチの可能性を示し得る点で発展性が極めて高い。

注

- 1) 敦煌加点本については石塚晴通「中国中古の加点本につきて」(第17回訓点語学会, 1967年11月), 『旧訳仁王経』(韓国訓読資料, 発見は1973年12月)については姜仁求「瑞山文殊寺金銅如来坐像腹藏遺物」(韓国国立中央博物館『美術資料』18, 1975年), 沈在箕「旧訳仁王経上 口訣에 대하여」(韓国国立中央博物館『美術資料』18, 1975年)を嚆矢とする。ただし, 敦煌本に句点や反切等の書き込みがあることに關しては, すでにジャイルズ目録(Lionel Giles: Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum, The Trustees of the British Museum, London, 1957)に記述があり, 1950年代後半から知られていたことになる。また中国と日本の加点の關係については, 石塚晴通「中国中古文献の加点と日本に於ける加点とにつきて」(第19回訓点語学会, 1968年11月), 新羅と日本の訓読の關係については藤本幸夫「古代朝鮮の言語と文字文化」(『日本の古代』14, 中央公論社, 1988年3月)に指摘がある。2000年に韓国で発見された点吐口訣資料については, 小林芳規・西村浩子「韓国遺存の角筆文献調査報告」(『訓点語と訓点資料』第107輯, 2001年), 南豊鉉・李丞宰・尹幸舜「韓国の点吐口訣について(韓文・邦文)」(『訓点語と訓点資料』第107輯, 2001年), 小林芳規「韓国における角筆文献の発見とその意義—日本古訓点との關係」(『朝鮮学報』第182輯, 2002年)があり, これ以降, 日韓両国での発表が続き, これらを踏まえて日本に現存する仏書訓点資料についても, 李丞宰「京都国立博物館蔵の『華嚴経』卷第十七の訓点」(『訓点語と訓点資料』第117輯, 2006年), 呉美寧・金星周「大東急記念文庫蔵『華嚴刊定記』について」(『訓点語と訓点資料』第119輯, 2007年), ジョン・ホイットマン「口訣資料と訓点資料の接点—佐藤本『華嚴文義要決』のヲコト点/点吐を中心に—」(第100回訓点語学会, 2009年)など, 海外の研究者から新たな問題提起がなされている。後述するが, この分野に關する日本の研究態勢(日本語学・訓点語学)がごく限られたものであるのに対して, 海外, 特に韓国では口訣学会主導の国際會議が頻繁に開かれるなど, 研究者の意識や研究態勢が全く異なっている。さらに, 第101回訓点語学会(2009年10月18日)では, 漢文訓読研究の方法論そのものについて, 海外の研究者や日本語学以外の研究者による発表があり(呉美寧他「漢文訓読用語の国際的共有について」, 岡本隆明他「デジタル画像資料による文献研究にむけて—HNGと画像内文字参照システムの統合的運用のこころみ—」), 従来の研究の在り方が大きな転換点を迎えている。
- 2) 小助川貞次「東アジア学術交流史としての漢文訓読」(『富山大学人文学部紀要』第51号, 2009年8月 <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo51.mht>)にやや詳しく述べた。
- 3) 表1の調査は, インターネット上に公開されている各大学のシラバスを対象に, それに付随する検索機能(全文検索, キーワード検索)を使って「訓点資料」「訓読」の二つのキーワードでそれぞれ行った。実際には授業科目名・担当教員名の一覧しか公開していないものや検索機能を伴わないシラバスが多く, ウェブ検索(Google)も併用した。対象とした国立大学は, 大学院大学4校を除く84校で, 2009年度開講の教養教育と学部専門教育について専任教員だけではなく非常勤講師による集中講義も含めた。「訓読」については該当数が多いので表1には掲げないが, 中国文学, 中国哲学, 東洋史学, 漢文学, 日本文学, 教育学等において漢文文献を読解するための手段としての「訓読」(すなわち, 高等学校の「漢文」の延長)を掲げているものばかりで, 「訓読」の原理や漢字文化圏における「訓読」について触れているものは富山大学人文学部における筆者の授業が唯一である。なお, 富山大学のシラバスは, 2004年度まで遡って検索できる(<http://syllabus.adm.u-toyama.ac.jp/syllabus/>)。
- 4) 小助川貞次「加点希薄な漢籍訓点資料における典拠の問題」(国際ワークショップ「漢文古版本とその受容(訓読)」, 北海道大学, 2001年), 同「訓点資料として見た春秋経伝集解卷第二について」(第85回訓点語学会, 福井大学, 2001年), 同「訓点資料の展開史における有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』の位置」(『日本語の研究』第4巻第1号, 日本語学会, 2008年), 同「有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』積文及び訓読文」(『訓点語と訓点資料』第120輯, 2008年)。
- 5) 小助川貞次「漢文訓読の研究と大学教育」(韓中日国際シンポジウム「漢字教育最前線」, 富山大学, 2004年10月 → 富山第一銀行奨学財団研究助成事業・プロジェクト報告書, 2005年3月), 同「デジタル版点本書目の構想について」(第95回訓点語学会, 2006年11月 → 科研報告書「国際的視点から見た日本語・

- 朝鮮語における漢文訓読に関する実証的研究」, 2007年3月), 同「日本における漢籍訓点資料研究の現状と課題」(韓国口訣学会, 2007年2月 → 『口訣研究』第18輯, 2007年2月 <http://www.kugyol.or.kr/>), 同「敦煌加点本を巡る研究課題」(第97回訓点語学会, 2007年10月 → 『富山大学人文学部紀要』第49号, 2008年9月 <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo49.mht>), 同「漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について」(第36回富山大学国語教育学会, 2007年11月 → 『富山大学国語教育』第33号, 2008年11月), 同「東アジア学術交流史としての漢文訓読」(『富山大学人文学部紀要』第51号, 2009年8月 <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo51.mht>) でも述べた。
- 6) 筆者が2004年から調査したスタイン本の漢籍36点の内, 画像が提供されているのは10点で (*S.10毛詩邶風, S.796莊子, *S.799古文尚書泰誓, *S.3330毛詩鴻雁之什, S.3395莊子, *S.3663文選卷第九, *S.3951毛詩周南, S.5473文心雕龍, S.5545孝經, S.8464古文尚書泰誓), さらに加点本となると5点しかない(*印)。
 - 7) 「文化財の国際協力の推進方策について(報告)」(平成16年8月26日, 文化財国際協力等推進会議), 「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する基本的な方針」(平成19年12月25日, 外務省・文部科学省告示第1号)などが参考になる。
 - 8) 石塚晴通・小助川貞次『敦煌点本書目』の構想」(第101回訓点語学会, 2009年10月18日)は, このような立場から敦煌本の書誌情報を捉えようとするもので注目される。
 - 9) もっとも訓点語学会の会則には「本会は, 国語学, 特に国語史の一環として, 主に漢文の訓点本およびそれに準ずる文献等, いわゆる訓点資料に見られる言語並びに諸事象についての研究を推進発展させることを目的とする。」(第2条)とあり, またHPに記載されている「入会のお勧め」にも「訓点語学会は, 平安時代初期から日本において漢文に記入されて来た古訓点を中心として, 広く国語史・文体史・古辞書等の研究をする人々の団体です。」とあり, 現在においても訓点語学会が東アジア漢字文化圏における漢文訓読について強く意識しているわけではない。
 - 10) 筆者は別表3に示す通り富山大学において漢文訓読に関する授業を展開してきたが, 筆者が指導教員となって卒業論文を書いた学生はここ10年で3人しかいない(うち2人は漢文訓読がテーマではなかった)。現在, 2010年3月卒業予定の学生2名が「史記訓点資料」で卒業論文を書いたが, このようなことは筆者にとっても希有な出来事である。
 - 11) 「確認カード」による記録をもとに, 教員が提示した(意図した)内容と学生が実際に理解した内容とのズレを分析し, 一つ一つ丁寧に教材を作り上げて行く必要がある。この件に関しては別途「地方国立大学における絶滅危惧研究種を巡る教養教育・専門教育の取組」(第16回大学教育研究フォーラム, 京都大学高等教育研究開発センター, 2010年3月18日)として公表を予定している。
 - 12) 富山大学PSNS: Psycho-Social Networking Service。文部科学省の平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定された富山大学の学生支援プログラム(「オフ」と「オン」の調和による学生支援)に基づいて運用されている学内関係者の専用システム。ユーザ数は教職員・学生を含めて約4,500人(2009年9月末現在)。コミュニティ, 日記, メッセージの機能があり, 筆者は今年度, 演習系の授業で2つ, 卒論等の特定学生の指導で2つのコミュニティを立てて使っている。
 - 13) 詳細については, 別途「東アジア学術交流史から見た漢籍訓読の問題」(麗澤大学「日・韓訓読シンポジウム」, 2009年11月21日)で取り上げた。
 - 14) (株)手嶋屋のホスティングサービスを使えば500ユーザで月額41,790円(<http://www.tejimaya.com/>)。訓点語学会の会員数で負担すれば, 一人月額100円程度。なお, mixi(ミクシィ)のような不特定多数(ウィキペディア「ソーシャル・ネットワーキング・サービスの一覧」にある表現を借りれば「ジャンルを特定しないSNS」)のユーザを対象としたSNSを利用する方法もあるが, 教育・研究に限定すべきなのか, それとももっと広く社会一般を対象とすべきなのか, 社会的共有を目指す本稿の立場にとっても検討すべき課題が多い。

付記

本稿は、2009年国際ワークショップ「漢字情報と漢文訓読」（北海道大学，2009年8月22日～23日）における口頭発表原稿「デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築」をもとに，その後の知見を加えて書き改めたものであり，科学研究費補助金・基盤研究B（海外学術調査）「国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究」（課題番号：19401024）による研究成果の一部でもある。

デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築

別表1 高等学校国語教科書(国語総合)における「訓読」の説明

出版社	出版年	編者	訓読
旺文社 高等学校国語総合	2005	山田有策	漢文は、その源をたどると、もともとは中国古代の文章語でした。そのため、日本語とは違いがあります。これから学習する漢文訓読法は、その違いを乗り越えるために発明された工夫です。私たちの祖先是、長い年月にさまざまな工夫を重ねて、この白文に「訓点」を施して読み解いてきました。そのことを漢文を訓読するといえます。
教育出版 国語総合	2005	加藤周一	最初、漢文は中国語として、ごく少数の人が修得に努めたが、やがてこれを日本語に翻訳しながら読むという訓読法が考え出された。
教育出版 新国語総合	2005	加藤周一	最初、漢文は中国語として、ごく少数の人が修得に努めたが、やがてこれを日本語に翻訳しながら読むという訓読法が考え出された。
桐原書店 探求国語総合 (古典編)	2005	亀井秀雄	漢文は、もともと中国の文語文である。日本語とは発音と構造が異なる中国語の文章を、訓点という独自の工夫によって、日本語の文として読むようにしたのが、今日の漢文である。漢文を日本語の文章として読むことを訓読という。
桐原書店 展開国語総合	2005	亀井秀雄	漢文は、もともと中国の文語文である。日本語とは発音と構造が異なる中国語の文章を、訓点という独自の工夫によって、日本語の文として読むようにしたのが、今日の漢文である。漢文を日本語の文章として読むことを訓読という。
三省堂 高等学校国語総合 〔古典編〕	2005 3版	柴田武	漢文とは、中国の古典語法によって漢字で書かれた詩文である。わたしたちの祖先是、長い間の苦心の結果、この漢文を、返点や送り仮名などの記号を使って、日本語の文語文に翻訳しながら読み、わたしたちの生活や文化を豊かにしてきた。
三省堂 新編国語総合	2005	柴田武	日本では、長い間、白文に訓点を付けることによって、中国の古典を日本語として読んできました。
第一学習社 高等学校国語総合	2005	稲賀啓二	われわれの祖先是、日本語とは構造や性質の異なる漢文を、原文のまま、日本語で読んでいく方法を考え出した。これを訓読という。
第一学習社 高等学校標準国語総合	2005	稲賀啓二	われわれの祖先是、日本語とは構造や性質の異なる漢文を、原文のまま、日本語で読んでいく方法を考え出した。これを訓読という。
大修館書店 国語総合	2005	北原保雄	漢文とは、古くからわが国にもたらされてきた中国の文章をいう。私たちの祖先是、この漢文を読解するため、もとの中国の文章の形はそのまま残しながら、しかも日本語にあてはめて訳読する訓読という方法を考案した。この漢文学習においては、私たちの祖先是苦心して編み出した漢文訓読のきまりをよく理解するところから始めて、わが国の文化を培ってきた漢文の世界に触れてゆく。
大修館書店 新編国語総合	2005	北原保雄	漢文がわが国に伝来してから、私たちの祖先是漢字文化を取り入れるために、訓読という方法を用いてきた。訓読とは、本来構造の異なる中国の文章を、もとの形はそのまま遺しながら、しかも日本語として訳読する方法のことである。
筑摩書房 国語総合	2005	大川公一	漢文のもとの形を保ったまま、そこに記号や仮名を付け加えることによって、日本語としてよんでしまおうという、一種の翻訳の方法が発明されました。これを漢文訓読といえます。
筑摩書房 精選国語総合古典編	2005	安藤宏	漢文のもとの形を保ったまま、そこに記号や仮名を付け加えることによって、日本語としてよんでしまおうという、一種の翻訳の方法が発明されました。これを漢文訓読といえます。
東京書籍 国語総合	2005	小町谷照彦	漢文とは、中国の古典の文章をいう。本来、中国語と日本語とは言語構造を異にするので、私たちの祖先是漢文をそのまま日本語として読むという方法を工夫した。これが訓読である。
東京書籍 国語総合古典編	2005	小町谷照彦	漢文とは、中国の古典の文章をいう。本来、中国語と日本語とは言語構造を異にするので、私たちの祖先是漢文をそのまま日本語として読むという方法を工夫した。これが訓読である。
東京書籍 新編国語総合	2005	小町谷照彦	漢文とは、中国の古典の文章をいう。本来、中国語と日本語とは言語構造を異にするので、私たちの祖先是漢文をそのまま日本語として読むという方法を工夫した。これが訓読である。
東京書籍 精選国語総合	2005	小町谷照彦	漢文とは、中国の古典の文章をいう。本来、中国語と日本語とは言語構造を異にするので、私たちの祖先是漢文をそのまま日本語として読むという方法を工夫した。これが訓読である。
右文書院 国語総合	2005	会田貞夫	漢文を訓読するために必要な、これらの送り仮名と返り点と句読点を合わせて訓点という。
明治書院 新編国語総合	2005 3版	久保田淳	漢文とは、中国の文語文である。我が国では、初めはこれを純粹の外国語として、ごく少数の人だけが習得に努めていた。しかし、時代が下るにつれて、漢文はしだい日本語の中に消化され、訓読法という独特の読み方が編み出されるようになった。訓読法とは、中国語の原文をそのまま保ちながら、しかも日本語(文語体)に翻訳して読む、という方法である。
明治書院 精選国語総合	2005 3版	久保田淳	漢文とは、中国の文語文である。我が国では、初めはこれを純粹の外国語として、ごく少数の人だけが習得に努めていた。しかし、時代が下るにつれて、漢文はしだい日本語の中に消化され、訓読法という独特の読み方が編み出されるようになった。訓読法とは、中国語の原文をそのまま保ちながら、しかも日本語(文語体)に翻訳して読む、という方法である。

別表2 事典・辞典における「訓読」の記述

書名	出版社	出版年	項目執筆者	訓読
国語学研究事典	明治書院	1977	村上雅孝	一字一字の漢字を、訓読または音読しながら漢文の語序を転倒し、日本語の文法に従って読み下すものである。…このような句切点の手法は、元来中国のものであるようで、それが日本にも伝来したものであろうと思われる。
国語学大辞典	東京堂出版	1980	築島裕	漢文の訓読とは、漢文の中の漢字を、逐語的に訓又は音で読みながら、文全体としては日本語の語法に合うように読み下すことをいう。
中国学芸大事典	大修館書店	1980	—	漢字または漢文をよむ場合、音読しないで和読するのをいう。
日本古典文学大辞典	岩波書店	1984	小林芳規	漢字漢文を語序や表記を改変せずに日本語の語法に従って一定の訓法で訳読すること。漢文をその語序のままにすべて字音で読む音読に対する。
日本漢文学大事典	明治書院	1985	—	音読(直読)に対し、漢字・漢語・漢詩文を日本語に直して和読するのをいい、漢詩文の場合は、訓点(返り点・送り仮名)をつけて読む。
日本語百科大事典	大修館書店	1988	—	訓読は、漢文を自国語で理解することでは翻訳と似るが、漢文の原表記をのこしたままでそれによりかきながら自国語で理解するという点で翻訳と異なる。訓読は、特殊な、しかも巧妙な言語活動である。
漢字百科大事典	明治書院	1996	築島裕	漢文をその原文に添いつつ、国語として訓むこと。(中略)漢文を基にして自国語で読んだ例は、古代朝鮮など中国周辺の諸国に例が多いが、原文に訓点を加えた例は少なく、それが伝統的に現代にまで及んでいるのは日本だけである。
日本語キーワード事典	朝倉書店	1997	小林千草	それらの典籍は、最初こそ中国音でよまれていたが、そのうち日本語を基調とする文構造にもとづいて訓まれるようになった。(中略)などの返り点に従うだけで、漢字がよみくだせるようになった。これが、「漢文訓読」であり、そうしてできた文は「漢文訓読文」と呼ばれる。
訓点語辞典	東京堂出版	2000	石塚晴通	漢文訓読は、漢文を自言語で理解することでは翻訳と似るが、漢文構文の原表記を残したままで其れによりかきながら自言語で理解するという点で翻訳とは異なる。訓読は、特殊な、しかも巧妙な言語活動である。漢文訓読は、日本語のみで行われたわけではなく、他言語による訓読も行われた。
日本語学研究事典	明治書院	2007	石塚晴通	漢文訓読は、漢文を自言語で理解することでは翻訳と似るが、漢文の原表記を残したままでそれを目で見ながら自言語で理解するという点で翻訳とは異なる。訓読は、特殊な、しかも巧妙な言語活動である。漢文訓読は、日本語のみで行われたわけではなく、他言語による訓読も行われた。
大辞林	三省堂	1988	—	①漢字を、その字の意味に基づいて訳した日本語で読むこと。「春」を「はる」、「北風」を「きたかぜ」と読む類。くんよみ。↔音読。②漢文を日本語の文法に従って、語の順序を変えたりしながら直訳的に読むこと(中略)③難しい言葉をわかりやすく説明すること。(中略)
日本語大辞典	講談社	1989	—	①漢字を訓で読むこと。②漢文を日本語の文法に従って読み下すこと。漢文訓読。
大辞泉	小学館	1995	—	①漢字を、その意味にあたる日本語の読み方で読むこと。「花」を「はな」、「草」を「くさ」と読む類。くんよみ。↔音読。②漢文を日本語の文法に従って、訓点をつけて読むこと。
日本国語大辞典(第2版)	小学館	2001	—	①漢字に国語をあてて読むこと。漢字を訓読みで読むこと。また、漢文を国語の文法に従って訓点をつけて読むこと。↔音読。②特に、経典を①の読み方で読むこと。転じて、そのような調子で、ものを読んだり歌ったりすること。③むずかしい言葉などを、わかりやすく説いて聞かせること。
広辞苑(第6版)	岩波書店	2008	—	①漢字に日本語をあててよむこと。秋を「あき」、天地を「あめつち」とよむ類。↔音読。②漢文を日本語の文法にしたがってよむこと。
Wikipedia	Web	2009	—	訓読(くんどく)とは、漢文を読む際に中国語や朝鮮語のように音読みせず、漢字の字義による訓読みを利用して、他の言語として読むことである。漢文訓読(かんぶんくんどく)とは、文語体中国語の文章である漢文を文体をそのままとして、符号などを付けることによって日本語の語順で読解できるようにすること。(2009年7月31日)

別表3 発表者による漢文訓読研究に関する授業一覧

年度	学期	科目名	学部	タイトル	主対象文献・内容	受講者	カード管理
2000	前	国語学特別講義	教育	訓点資料研究の課題	漢籍訓点資料	20	
2000	前	日本語学特殊講義	人文	『文選』古訓法の研究	五臣注本文選巻第二十	?	
2000	後	日本語学特殊講義	人文	文選学史の研究	『文選』受容史記事データベース	?	
2000	前	日本語学演習	人文	古典的テキストの文献学的処理	漢書楊雄伝	?	
2000	後	日本語学演習	人文	古典的テキストの文献学的処理	漢書楊雄伝	?	
2001	前	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	春秋経伝集解巻第二	40	
2001	後	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	春秋経伝集解巻第二	12	
2002	前	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	春秋経伝集解巻第十	30	
2002	後	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	宇多天皇宸翰周易抄	20	
2002	後	日本語学演習	人文	漢字文献の研究	史記孝景本紀(延久本)	?	
2002	後	教養原論	全学部	『史記』訓読の世界	史記孝景本紀(延久本)	?	
2003	前	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	宇多天皇宸翰周易抄	24	
2003	後	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	毛詩唐風殘卷・敦煌本毛詩鄭箋	?	
2003	後	日本語学演習	人文	漢字文献の研究	文永本論語集解	?	
2003	後	日本語学講読	人文	漢字文献の処理	文永本論語集解	?	
2004	前	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	敦煌本毛詩鄭箋	27	○
2004	後	日本語学特殊講義	人文	漢文訓読史の研究	古文尚書平安中期点(岩崎本)	15	
2004	後	日本語学講読	人文	「訓」の検証	願野玉篇	11	
2004	後	日本語学演習	人文	漢文文献の研究	古文尚書平安中期点(神田本)	2	
2004	前	教養原論	全学部	訓読から kundoku へ	漢文訓読史概説	101	○
2005	前	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	世説新書	35	○
2005	後	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌本毛詩鄭箋、文選	21	
2005	後	日本語学演習	人文	漢字文献の研究	世説新書	17	
2005	後	日本語学講読	人文	漢字文献の基礎	『漢籍』(『訓点語辞典』)の増補改訂作業	15	
2005	前	教養原論	全学部	ようこそ新「漢文訓読」の世界へ	漢文訓読史概説	79	○
2006	後	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌本春秋経伝集解	20	
2006	前	日本語学演習	人文	訓点資料の国際的標準の構築	デジタル版点本書目の作成	39	
2006	後	日本語学演習	人文	訓点資料の国際的標準の構築	テキスト版解読資料の作成	26	
2006	前	教養原論	全学部	ようこそ「漢文訓読」の新世界へ	漢文訓読史概説	87	○
2007	前	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌加点本・日本語漢籍訓点資料の破音	41	○
2007	後	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	華嚴関係訓点資料	43	○
2007	前	日本語学演習	人文	訓点資料の文献学的研究	春秋経伝集解巻第二	27	○
2007	後	日本語学演習	人文	訓点資料の文献学的研究	宇多天皇宸翰周易抄	23	
2007	後	日本語学講読	人文	漢字文献の基礎	多言語対応型訓読術語集の作成	9	
2007	前	教養原論	全学部	ようこそ「漢文訓読」の新たな世界へ	漢文訓読史概説	131	○
2008	前	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌加点本の諸相	44	○
2008	後	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌加点本データベース	40	○
2008	前	日本語学演習	人文	訓点資料の文献学的研究	国家図書館本『史記』	30	
2008	後	日本語学演習	人文	訓点資料の文献学的研究	国家図書館本『史記』	13	
2008	後	日本語学講読	人文	漢字文献の基礎	多言語対応型訓読術語集の作成	34	
2009	前	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	東アジア漢文訓読概説	100	○
2009	後	日本語学特殊講義	人文	東アジア学術交流史としての漢文訓読	敦煌加点本データベース	59	○
2009	前	日本語学演習	人文	東アジア漢文訓読資料の研究	敦煌加点本(スタイン本)	37	SNS
2009	後	日本語学演習	人文	東アジア漢文訓読資料の研究	敦煌加点本(ペリオ本)	9	SNS
2009	後	日本語学講読	人文	漢字文献の基礎	デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築	23	SNS